

『白沢凶』の展開から見えてくる  
モノからコトへ

高戸 聰



四六判 176頁  
白澤社／現代書館発売  
[本体2000円＋税]

佐々木聡著

復元 白沢凶

古代中国の妖怪と辟邪文化

者にも、読んでもらうための配慮と言えるだろう。

それでは、本書の構成を理解するため、以下に目次を挙げよう。

はじめに

第一章 『白沢凶』とはなにか——その伝説と成立

一、白沢伝説

黄帝、白沢と出会う／『易』の影響

二、『白沢凶』の成立と鬼の名前を呼ぶ辟邪方法

鬼神世界の名簿／鬼神の名前を呼ぶ呪言

三、『白沢凶』と『山海経』

禹鼎伝説との類似／『夏鼎志』の怪異観／自然に起る現象としての怪異

白沢は、中国由来の神獣であるが、日本でも長きにわたって親しまれ、近年ではマンガや小説などでも登場している。例えば、畠中恵氏の小説『しゃばけ』シリーズや江口夏実氏のマンガ『鬼灯の冷徹』などで、ご存じの方もおられることだろう。

本書は、神獣としての白沢およびその名を冠した佚書『白沢凶』とその展開についての、まとまった解説書である。その読者としては、著者が「まえがき」で述べるように、「妖怪文化に興味を持つ方々をはじめ、広く中国や日本の文化に関心を持つ方々」(六頁)が、想定されている。それ故か、本書では、本文中に中国古典を引用する際にも、現代日本語に訳して挙げられており、極力、原文や訓読は廃されている。それは、中国学研究者だけでなく、広く一般の妖怪好きの読

#### 四、『白沢図』以降の白沢文物

『白沢地鏡』と地鏡経／莫高窟から見つかった『白沢精怪図』／『礼緯含文嘉』地鏡経・精魅篇

#### 第二章 『白沢図』輯校

白沢図の分類と配列について／五行（木・火・土・金・水）の性格を持つ精魅／山谷の精魅／場所の精魅／建物・宅中の精魅／器物の精魅／動物の精魅／気象の精魅／その他の精魅／龍の化身／怪異占として引かれる例

#### 第三章 神獣白沢の姿——辟邪絵としての白沢の図

一、辟邪絵としての「白沢の図」

明代の白沢の図

#### 二、日本の「白沢の図」「白沢避怪図」

白沢避怪図の賛／伝雪舟筆の白沢避怪図／『涉世録』と『事林広記』／宗教者の辟邪書から一般向け縁起物へ

#### 三、白沢の姿

人面牛身が一般的な日本の白沢／本場中国の白沢の姿／龍首型と虎首型／羊が白沢に変化する／敦煌写本の

白沢の図

#### 補章 「白沢」研究の軌跡

一、神獣白沢とその画像研究

二、『白沢図』の資料研究

#### 附録 『礼緯含文嘉』精魅篇

参考文献一覧

あとがき

本書は、補章と附録を含め、全五章で構成されている。そのうち、第一章、第三章、補章は概説、論述部分であり、第二章と附録は、原文と現代語訳が掲示される、いわゆる訳注である。それでは以下に、章ごとの簡単な紹介をしたい。

第一章では、『白沢図』についての伝説や、『白沢図』から派生した「白沢文物」について、概説をしている。「白沢文物」とは、「白沢伝説と『白沢図』にちなんだ」「一種のオマージュにより創出された白沢作品群」（三三三頁）である。そもそも「白沢図」とは、万物の精に通暁した神獣である、白沢の言葉を聞いた黄帝が作ったとされる書物である。「白沢図」という書物は、かつて実在しており、今日では散佚してしまっている。本書では、その散佚時期を北宋の中頃（『太平御覧』の成立から『崇文総目』が編纂される間）（三三三頁）と想定している。

第二章は、『白沢図』佚文を「集成・校訂し、注釈（校勘記・現代語訳・解説を付したものである）（四八頁）。この第二章では、原文とその現代語訳は提示されているが、訓読は廃さ

れている。これも、先に述べたように、研究者のみならず広く一般の読者にも読んでもらえるように、との著者の配慮であろうか。ただ、訓読がないことは、この章の価値を何ら減じるものではない。佚文の出典は可能な限り提示されており、校勘は緻密である。また、「必方」や「罔象」など、他書に異伝や類話あるいは先行研究の蓄積がある精魅については、簡にして要を得た解説が付され、読者の興味を惹くよう心配りがなされている。

本書の中心をなすのは、書名の通り、佚書である『白沢図』の復元を試みたこの第二章であろう。ただし本書の価値は、『白沢図』散佚以降に表れた『白沢文物』について、丹念に解説している点にも存しよう。

第三章では、「白沢文物」について、主に白沢の図像の変遷に焦点を当てて解説する。とりわけ興味深いのが、『星禽』という一種の占星術の書に書かれた、「羊が白沢に変化する」ことを紹介するくだりである。この『星禽』には、馬超の主星である羊が白沢に変化したので、そのおかげで馬超は三たび曹操を破ることができた、と書かれている。『星禽』は著者が調査中に発見したとのことで、評者も本書によって初めて知ることを得た。主星に禽獣を配して占うことや、その禽獣が変化してランクアップすること、さらに三国志の故事と

結びつけられていることなど、中国学研究者ならずとも、興味をそえられる内容であろう。

補章では、これまでの白沢研究についての紹介と論点の整理が行われている。あるいは研究者にとつては、第一章からではなく、この補章から読んだ方が本書を理解しやすいかも知れない。

附録は、『礼緯含文嘉』精魅篇の訳注である。この『礼緯含文嘉』は、これまでほとんど知られていなかった、言わば新出資料である。その研究史における意義について、著者は「白沢文物の辟邪対象が精魅から怪異現象へと変遷する過渡期にあたる」(一四二頁)資料である、と指摘する。

そこで次に、「精魅から怪異現象へと変遷する」ことについて説明するため、本書の論旨を要約しよう。まず本書は、鬼の名前を呼ぶことで鬼を使役、撃退することができるという考え方が、『白沢図』成立の背景にあるとする。そもそも「名前を呼ぶ辟邪方法」(二三頁)は、戦国時代の『管子』にまで遡ることができ、後漢の高郵邵家溝漢墓から出土した木簡にも同様の考え方を看ることができるとして、六朝になると、「天下の鬼神の名前を知る方法」(一九頁)として、『抱朴子』に、『白沢図』の名が表れるのである。『白沢図』は、「○○○の精、名は△△、その姿□□で、名前を呼べば逃げ去る」(三八頁)

# 中国年鑑2017

◎ 5月26日刊行 ◎

中国研究所 編・発行

明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 522頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝党大会と巨電の行方

習近平政権は、国内外にさまざまな問題をかかえながら、ますます存在感を増している。今秋5年ぶりに開かれる共産党第19回大会を経て、中国はどこへ向かうのか？ 今日の日中国に関する多方面にわたる情報を提供します。

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2016年日誌ほか  
※お問い合わせ・ご予約は  
中国研究所事務局まで

一般  
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@icn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

のように、精魅そのものについて記述している。

一方、敦煌文献に『白沢精怪図』という占書がある。この書は、「白沢文物」であり、散佚した『白沢図』そのものではない。『白沢精怪図』は、「革帯が夜に光れば、（これは不吉な予兆だから）酒と干し肉を供えて祭れ。さもなければ、売り払うべきである」（三七頁）のように、怪異現象とそれへの対策を記述している。

『白沢図』と『白沢精怪図』のそれぞれが持つ特徴について、著者は「怪異・妖怪研究の分野では、モノ（存在≡鬼神・精魅など）とコト（現象≡怪異）を分ける見方があるが、この見方で言えば、『白沢図』はモノを、『白沢精怪図』はコトを、それぞれ主体とする書物と言うことができよう」（三八頁）と指摘する。そのうえで、「おそらくすでに唐代では、『白沢図』の内容に

対する理解が、本来の「モノを対象とする」というイメージから、「コトを対象とする」というイメージへと移りかわりつつあったのだろう」（四〇頁）とする。

『礼緯含文嘉』精魅篇は、一見『白沢図』のような形式で書かれている。しかし一方で、「犬が悪声を挙げて走り、自分でその尾を咬むことは、（その精魅の）名は鞞と言う。その名を呼べば、即座に止む」（四二頁）のように、怪異現象とそれを起こす精魅の名及びそれへの対策も記している。著者は、「白沢文物の辟邪イメージが、精魅そのものから、徐々に怪異現象へと拡大していった状況が如実に反映されている」（四二頁）、とその特徴を述べる。

右記のように著者は、新出資料の『礼緯含文嘉』精魅篇を用いることで、「白沢文物」の系譜を裏付けることに成功し

ている。

さらに著者は、「白沢文物は、人々に広く受容されてゆく中で、神仙家や宗教者が用いた専門的な辟邪書から、次第に一般向けの縁起物となっていくのだろう。辟邪対象が、宗教者でなくては見ることでできない鬼神や精魅から、誰でも目の当たりにすることがある怪異現象へと変化したこともそのためであろう」（一九頁）と考察している。言い換えるならば、専門的な宗教者の持っていた知識が一般の人々に浸透していったことに起因して、モノ（精魅）からコト（怪異現象）へ辟邪対象が変化していった、ということだろう。著者の考察は、白沢研究のみならず、占書や専門的な宗教者など、広く古代中国の宗教文化に関心を持つ読者にとっても、示唆に富むものである。

本書は、著者のこれまでの調査や研究が遺憾なく発揮された力作である。敦煌文献はもとより、『礼緯含文嘉』や『星禽』などの新出資料も挙げられており、その調査の広範さが窺われる。

ところで、妖怪ファンの間でも『山海経』は、訳本が何種類も出版されるなど、これまでもよく知られていた。しかし『白沢図』の方は、「白沢文物」を含め、その名前を知っている、内容まで知っていた妖怪ファンは多くなかっただろう。

本書によって、『白沢図』の内容までも妖怪ファンに知られるようになり、いつか『白沢図』由来の妖怪が別のメディアで活躍することを、評者は願って已まない。

蛇足ながら、妖怪好きの読者として、本書を読んで一つ発見があった。小野不由美氏の小説『十二国記』シリーズに、「賓滿」という妖魔が登場する。本書第二章の『白沢図』輯校にも「賓滿」（七三頁）が採録されており、あるいは小野氏は『白沢図』の佚文から着想を得たのかも知れない、と想像した次第である。

（たかと・さとし 福岡女学院大学）